中日新聞２００７年１１月２５日【社説】

水の惑星」が危うい

月探査衛星「かぐや」が送ってきた地球の映像は青く美しく輝いていました。ところが、あらゆる生きものを乗せた「水の惑星」の将来は、とても危ういのです。

宇宙に飛び出した飛行士がほとんど例外なく感動するのは、漆黒の闇の中にただ一つ浮かぶ青い地球の姿だといいます。

広大な宇宙空間をどう探しても、現代科学では地球以外で生きていく場所を見つけることはできません。もうフロンティアはないのです。

「かぐや」からの「地球の出、地球の入り」の動画をながめながら、「地球号」に乗り合わせているという感慨を持ちました。このかけがえのない乗り物が「水の危機」に見舞われています。

牛丼一杯に二千リットルの水

東京で開催中の「水」をテーマにしたある企画展でこんな質問が用意されています。

「牛丼一杯にどれだけの水が使われているか知っていますか」

答えは二千リットル。二リットルのペットボトルにして一千本分にもなります。担当ディレクターの佐藤卓さんが次のように解説しています。

月周回衛星かぐやが撮影した
地球の出　ＪＡＸＡ・ＮＨＫ提供

「牛の餌を育てる水、牛が飲む水、米を育てる水などを含めると、それぐらいの量が使われている」

これは一例にすぎません。海外では、日本が輸入する食料を作るために、毎年四百五十億立方メートルの水が使われているともいわれます。この量は、日本人が使う上水道量の三倍にもなります。

食料の自給率が四割（カロリー換算）の日本は、穀物や畜産物などとともに膨大な「水」の輸入国でもあるわけです。実際の欧州などからのボトル入り飲料水の輸入も年間八十万トンに及ぶそうですが。

食料だけではありません。中央アジアのウズベキスタンのアラル海が消えつつあることをご存じでしょうか。綿花を栽培するため、流れ込む川の水を大量に使ったからです。

かつては世界四位の面積を誇った湖は干上がり、湖水は塩分濃度が高くなり淡水魚は絶滅しました。

それでも川からの取水はやめていません。綿花は外貨を稼ぎ、農業国の基礎となっているからです。日本にも安価で良質な綿製品が供給されています。

牛丼にしても綿製品にしても「見えない水」が循環して日本に現れているのです。国境を超えるモノ、カネ、情報と同様に、水もまたグローバル化した存在なのです。

その水は限りある資源です。地球上の水の大半は海水(９７％)で、残る多くも北極や南極などの氷です。湖や沼、河川など使いやすい形で地表にある淡水は地球上の水のわずか０・００８％にすぎません。

温暖化は 水の危機」に

だからこそ、地球温暖化による環境問題が「水の危機」として表面化するのです。国連の気候変動に関する政府間パネル（ＩＰＣＣ）の統合報告書が警告しています。

氷河や積雪が解けて海水面が上昇し、島国やアジアのデルタ地帯では洪水の被害にさらされます。

すでに、二〇〇五年までの五年間にアジア・太平洋地域で毎年平均六万二千人が水災害の犠牲になりました。大型サイクロンの直撃を受けたバングラデシュの惨状は記憶に新しいところです。

干ばつの増加が農林業に打撃を与え、数億人以上が水不足の影響を受けるといいます。国家や民族間の水争いが深刻化するかもしれません。

日本でも、集中豪雨や降雪の減少によって都市型洪水や渇水のリスクが増大する恐れがあります。水温上昇に伴う河川や湖沼の生態系の変化や水質悪化も懸念されます。

水問題の取り組みは、温暖化の主因である二酸化炭素の排出量緩和と並ぶ重要課題となりました。二十一世紀の国際社会は「空気と水」の問題に直面したわけです。

こうした状況を受け、来月三、四日に大分県別府市で第一回アジア・太平洋水サミットが開かれます。域内の環境問題責任者が集まり、具体的政策を提言するのが目的です。授です。「限られた地球の資源を、百億に達しようとする地上の人間が、いかに分かちあい有効に利用するかを考えることなくして、人類文明の存続はありえない」（「日本よ、森の環境国家たれ」）

地球号」乗組員の責務

森と川と水田、そして海の水の循環系を壊さず、水を媒介に人がつながって生きてきたのが日本の文化です。安田教授はそう言って、農業と林業の再生が急務と力説します。

水の問題は文明のあり方にまで及びます。そういう意識を持ち、対応を考えることが水の惑星「地球号」の乗組員一人一人の責務でしょう。